

沖

5
2022

俳句雑誌【沖】



能舞台

能村 研三

能村家の
ファミリーヒストリー

立春大吉起きがけの首回しけり

うすらひのかけら日よりも眩しかり

川幅に敵ふ水音水草生ふ

浅春の声ゆき渡る能舞台

初午の燈明に笙奉る

鞆を大きく漕ぎて別れけり

遠目にも竹林の濃き涅槃の日

しろじろと草に根のある雨水かな

二月礼者流行にやや疎きかな

西方より戦火の匂ふ霾降り

五月二十四日は父登四郎の命日で平成十三年に亡くなつて二十一年が経つた。我が家の仏壇には能村家先祖代々の位牌が祀られているが、位牌をつぶさに見てみると父の父、私には祖父に当たる二三郎も五月二十四日が命日で、昭和九年に亡くなつてゐる。

二三郎は父の話によると金沢で宮大工をしていたそうで、頑固で強情で負けず嫌いな人であつたらしい。東京に出て大きな工務店を営み、父が生まれた時の記念写真には店の衆百人位が背景にしているものがある、その写真からもその時の隆盛ぶりがうかがえる。

先日、父登四郎の書庫を整理していたら、父が途中で書きかけた能村家の家系図が出てきた。しかしまだ完成されてはならず、私も気にはかけていたものの多忙にかまけてそのままに残つてゐる。

汗ばみて加賀強情の血ありけり

登四郎

私は能村家の親戚一同の中でも一番若いので、昔のことが分からないまま現在に至つてゐるが、家系にことに詳

しなかつた従妹も他界してゐるので、もはや聞ける人はいなくなつてしまつた。

先日試みに父の本籍地である北区田端の戸籍原簿を調べてみようと思つた。書類を取り寄せてみた。それによると父には姉が二人と兄が二人そして妹一人がいて、父の母、つまり私の祖母にあたる人はかねと言つて東京の神田区千代田町の生まれの人であつた。

NHKテレビの「ファミリーヒストリー」は、有名な父母や先祖がいかに生き抜いてきたかを日本国内外や関連人物へ取材する番組で私もよく見ている。私もこうして先祖のルーツを探っていくことは中々興味深いことである。

春の彼岸には菩提寺延壽寺の墓に詣でたが、墓には祖父や祖母が祀られているのだということを改めて認識した。

乗つ込みの勢のままに釣られけり
 春泥の靴脱ぐ後ろめたさかな
 剃りあとの顎のすべりや燕来る
 かたくりの一花一花に憂ひあり
 口遊ぶ歌は変わらず青き踏む
 引退の馬の憩へる桜かな
 鳥帰るお地藏様は西を向き

右も左も分らずに上京した私には、都会は生きてゆく為に戦う場であり、田舎は田畑を守って維持する場であるという短絡的な考えがあった。そして時に、都会で疲れた心身を自然豊かな田舎の空気が癒してくれる、その癒しの場こそ「ふるさと」と言うべきものと思っていた。そんななかで登四郎先生の「東京をふるさともち春惜しむ」という句に出会い、いろいろと考える機会を与えられた。春を惜しむと言えは「行く春を近江の人と惜しみける」という芭蕉の句が好きであるが、先生が春を惜しむという気持ちの根底には、きつと「春潮の遠鳴る能登を母郷とす」という血脈の、ふるさとがあるのであらう。東京の谷中で生まれた先生ではあるが、眼差しはいつも遥か遠くを見つめているような気がするのである。

蒼 茫 集

喝 采

千 田 百 里

陽炎に消えし水切り宗易忌
 冴返る音又のやうな都庁ビル
 *羽搏きは喝采に似て鶴帰る
 トンネルの掘れぬ砂山亀鳴けり
 籠り家に向き合ひ鶯餅ふたつ
 古き書のパラフィン紙鳴る暮春かな

熱きもの

林 昭 太 郎

*風花や唇といふ熱きもの
 春立つや水のはたらく発電所
 春寒料峭目薬の頬つたひ
 花冷のラップの端を見失ふ
 墨の香のなかに墨磨る朧の夜
 ジーパンの穴にも美学風光る

石の芯

能美昌二郎

駅長の指差し喚呼春立つ日
三方より放ちし野火の合寄り
*如月や逆らふ事も生きること
撥ね返す一枝の力しづり雪
予報士の棒の先より冴返る
春寒や石の芯より石の声

知の地層

峰崎成規

海隴進化おぼろの深海魚
富士雪解溶岩の濾したる伏流水
紐解けて黒き団結蝌蚪の国
隴夜に一途な星を見失ふ
海市立つ足裏に軋む砂の音
*束ねたる書は知の地層春惜しむ

中天

辻美奈子

*菜の花や中天くもりながら照る
竜天に登り玉座のごとき雲
露西亜汝が祖国光の春なるぞ
碎かれてなほ濡れ色の烏貝
かうしてはをれぬ露の臺また伸びて
シユプレヒコール波なしてくる杉花粉

俯くな

千田敬

主治医より病名賜ひ梅真白
病名告ぐ名医の傍へ黄水仙
*俯くな春の涙は未来へと
菜種梅雨籠り夜咄でもせむや
雪柳風の湧く木と言ふべけれ
小流れを辿ればそこに露の臺

潮鳴集

静か 七田文子

朱鷺棲むてふ梢たかだか雪解川
頑丈な臍を齧りて卒業す
春一番まなじり赤きドーベルマン
海市立つそこに住んでもいいですか
* 静かとは花の雨来る気配かな

アネモネ 平松うさぎ

木偶二つ三味の音に泣く春寒し
ひだまりを吹き出してゐる黄水仙
染付の藍はくづし字花菜漬
甲羅脱ぐ夢みて亀の鳴きにけり
* アネモネや腕は武器を喜ばず

春光 関根揺華

春光を掬ひつ綴る刺繍かな
枳酒に表面張力鳥雲に
* 昼と夜重なつてゆく紫木蓮
潮騒の届く店先吊し雛
立ち上る轆轤の壺や風光る

謀叛 くどうひろこ

* 野火走る謀叛のほひして走る
雁供養木切れは小さき虫を抱き
もののふの御霊を包む桜かな
桃の日や手窪ほどなる嬰の靴
花束を母に買ひたる卒業子

童唄 中村重幸

四つ角の道それぞれの余寒かな
ものの芽の光の中に撮られけり
梅の寺言の葉怖き童唄
淡雪や竹人形の削り屑
* 狂ひたるもののかたち野焼かな

落の臺 阿部眞佐朗

* 生き生きて見ゆるものあり魚は氷に
俎板に落とす刃音や春動く
劇聖の睨みの誘ふ遠雪崩
魂の深き子であれ落の臺
早蕨の耀ふ朝の切通し

騙し絵 小林陽子

野火果てて身ぬちにひとつ燃ゆる星
試験管並ぶ窓辺のヒヤシンス
* 夜のぶらんこ大人にもある反抗期
鳥雲に入る散骨はこの海に
騙し絵の中から少女風光る

桜海苔 平城静代

白波を砕く礁や桜海苔
* ものの芽の大地を弾く息吹かな
立ち上る不動明王野火猛る
末黒野を爪先立ちて渡りけり
美容室のうぬぼれ鏡二月尽

木椅子 小川流子

蝶結びやうやくできて入学す
黒曜石の太古の光冴返る
遠足の一直線に森を出る
* 花過ぎの木椅子向き合ふやうに置く
桜糞ふる道ついて来るは何

あかあかと 宮坂秋湖

根深汁老いてはをれぬ厨ごと
暁鐘の一打一打や梅開く
鳥帰る山の彼方を明々と
* 吾もまたあかあかと生く冬木の芽
ワクチン三度老若男女余寒なほ

飛鷹選評



能村 研三

一本の藁にはじまる野焼かな

里村 梨邸

現在行われる野焼では、この句のようなことはあり得ないかもしれないが、縄文時代は石と石を打ち付けて火を起こし、藁に火を付けて土器を焼くなどしていたのだろう。一本の藁に火をつけて大きく炎を上げて燃え上がることを思うと火というものが神々しく思えてくる。

嘴にひかり集める春の鴨

吉村さよ子

春深くなっても帰らずに水辺に残っている鴨。残り鴨とも言うが、池に浮かび逆立ちをしながら水の中の水草を啄ばんだり、水面を嘴で掬うようにして餌を採る。遠くから見ていると鴨たちの箸は春の日差しの周りの光を集めているように見えた。

遙かなるいのちを紡ぎ物芽出づ

佐々木 茂

物の芽とは春のもろもろの草木の芽のことで、草の芽とも木の芽とも限定されないが、木の芽より草の芽についていうことが多い。春の息吹を感じる言葉で、この季節になると遙か昔よりのちを紡ぎながら次の時代に繋いで

いくのである。

風光る広がる風の凱歌かな

河野 智子

「風光る」という季語の扱いはかなり難しい。簡単に句にしてしまうと幼稚な句になってしまっこともある。春とはいえ、まだまだ寒い毎日が続くが、光はふんだんに降り注ぎ、辺りの風景を明るくしてくれる。寒気の残る中、風が光るといふことは風の凱歌なのかも知れない。

猫の日や猫の寄り合ふ春隣

福田 肇

「猫嫌い」を自称する私が珍しく猫の句を二句続けて採った。今年は2022年2月22日で、2が6つも並ぶことから「スーパード猫の日」と呼んだそうだ。この日は暦上では春だが、春の訪れを感じることが出来、猫たちも心地よく仲間と寄り合っていた。

月出ても月出なくとも猫の恋

中谷 恭子

「猫の日」が制定されたのも、単に2が猫に似ているからだけでなく、「猫の恋」という季語が伏線にあったからかも知れない。「猫の恋」は早春の発情期を迎えた猫の行動を指す季語だが、猫にとっては月が出て出なくても関係がないことなのかも知れない。

里神楽一笛星を弾き出し

竹田 絹子

里に伝わる神楽は笛や太鼓などで囃し演じられる。演目が始まるとともに奏でられる一笛の音色でこれまで騒んでいた会場は一気に静寂化し、天の星々たちを弾き出すようであった。

沖作品



能村研三選

春寒や醪つぶやく仕込樽

千葉

里村 梨郵

* 一本の藁にはじまる野焼かな
長閑さやしきりに動く山羊の顎
たらちねの母のちりめん吊し雛

一羽翔つ音に万羽の鳥帰る

* 嘴にひかり集める春の鴨

吉村さよ子

日脚伸ぶ村にちんまり疱瘡神

春寒の小鍋仕立ての酒の当て

黒パンの滋味噛みしめる浅き春

残り鴨応へなき声くりかへす

蜂蜜がやはらかに寒の明

早春の候と書き出す見舞かな

* 遙かなるいのちを紡ぎ物芽出づ

古箱に若きお顔の雛かな

桜湯や遠き緑者と隣あひ

市川市

佐々木 茂

おだやかな遠嶺に雪の残りたる

大分

河野 智子

麦の芽や踏まれて伸びる意地もあり
秒針の音なく回る雪の夜
ほころびの繕ひ未だ春愁

* 風光る広がる風の凱歌かな

* 猫の日や猫の寄り合ふ春隣

市川市

福田 肇

諭吉忌や今宵は鯛の潮汁

風光る鋸山の観世音

侵略に怒り春待つウクライナ

引退だべ冬の浪速路ラストラン

(福士加代子さん)

啓蟄や地球飛び出す漠あり

青森

中谷 恭子

ふきのたう津軽の空をまぶしがり

微笑みし写真の母へ梅一輪

薄氷を透かして明日見てをりぬ

* 月出ても月出なくとも猫の恋